



5月の洪水で被災した村の若者が、木材やブロックなど家を建てる資材の運搬に、総出で協力してくれました。(スリランカ・ラトゥナブラ県)

そこに、支援を
必要としている
人がいる。

災害が起ると、
支援が集中する地域があります。
支援から取り残される地域もあります。
バスや電車が通っていない
山道を延々と歩き、
谷間の川を渡り、
道路が寸断されてしまった村を目指す。
JENが優先するのは、
こういった地域です。
なぜなら、そこに、
最も支援を必要としている
人がいるからです。

ミモザ・トーク mimosa TALK

Talk for Peace,
Action with Smile



※Chabo! (チャボ)とは・・・
Charity Book Program (チャリティ・ブック・プログラム) のこと。
心ある著者たちの厚意により実現した印税寄付プログラムです。
Chabo! に登録されている本が売れるとその本の著者の印税の20%がJENを通じて、世界中の難民・被災民の教育支援、自立支援に使われます。勝間さんはじめ21名の著者が参加。2017年7月末時点で、累計約1.1億円が寄付されています。

vol.05 一人ひとりの力を活かす支援を。

今回のミモザトークは、経済評論家の勝間和代さんをお迎えしました。10年に渡り、Chabo! ※を通じてJENを支えてくださっています。

—— Chabo! を始めたキッカケをお教えてください。

勝間 本を買える人って、世界から見るとすごく幸せな人だと思うんです。世界には、教育もなかなか十分に受けられず、ましてや本を自由に買えない人も沢山います。だから、その分を還元したいという発想です。

木山 JENの活動地に5カ国ほど、一緒に訪問していただきましたね。

勝間 はい。各国が抱える政治や社会構造の問題が大きく、個人だけではなく、社会全体が自立する仕組みが必要だと感じました。その方法のひとつとして、生産性の向上が大切だと考えています。技術の導入が遅れる事によって、先進国と途上国の生産性に、どんどん差が開いています。例えば、道路ひとつにしても、先進国だと技術の発展によって質の良い道路が、少ない人員で安く作れています。

生産性や技術力が向上すれば、人は更に高度な仕事に就く機会ができる。逆に生産性が低い仕事に就いてる限り絶対儲か

らない。すると国は貧しくなる。支援される側の人は、みんな口々に言ってますよ、「一番ほしいのは“技術”だ」って。政治に外部が介入すると、状況をかえって悪くすることのほうが多い、と感じています。でも、技術支援などによって、豊かになれば奪い合いがだんだん少なくなってくる。

木山 生産性の向上は喜ばしいことですが、環境への負荷などに気をつけないと、ただでさえ厳しい状況の人びとが更なる自然災害に巻き込まれるなどのマイナス面もでてくることを、私たち一人ひとりが注視していないといけませんね。では、今一番求められている支援は何だと思いますか？

勝間 教育、情報共有、そしてそれが経済力につながるような支援を行っていくことしか無いと思っています。もし子どもたちが英語を理解できて、インターネット環境があれば、格段に収入が上がるというデータもあります。

木山 その教育に取り残される人びとは、格差が開き、更なる厳しさに直面するのではないのでしょうか？

勝間 社会では、どうしても格差は生じるものです。でも『不公平という格差』は無くすことはできる。

木山 それは、教育と就業機会をつくることで解消されるとお考えなのですね。

勝間 はい。どの国もどうすれば自立できるかを知っているのは、その国の国民です。その国民に対してエンパワメントするのが近道だと思うんです。一人ひとりの力を活かす支援が求められているのではないのでしょうか。

木山 まさにそう思います。紛争中の国では『兵士になるくらいしか働き口がない』という状況を変えていくことが大切だと思います。教育があれば、自ら仕事を作っていく可能性もありますね。本人たちの力が発揮される環境を整備することが求められていると思います。

対談の続きはWEBで!
<http://www.jen-npo.org/mimosatalk>

TALK with

勝間 和代(かつま・かずよ)

経済評論家、中央大学ビジネススクール客員教授。大学在学中に当時最年少の19歳で会計士補の資格を取得。現在、株式会社監査と分析取締役、内閣府男女共同参画会議議員 等として活躍中。ウォール・ストリート・ジャーナル「世界の最も注目すべき女性50人」選出。著作多数、著作累計発行部数は500万部を超える。

皆さまからのご寄付は、寄付金控除の対象です。
最大で約40%が所得税の税額控除となります。

※控除額は寄付金額や年間所得額によって異なります。詳しくはホームページをご覧ください。

 **生きるちから マンスリーサポーター**
あなたの毎月の支援で、世界の人びとの、生きる力をサポートします。

 **郵便局から**
00170-2-538657
口座名 JEN

 **遺贈寄付**
ご自身の財産や大切な方の遺産を、JENが支援する世界中の人たちへ、確実にお届けします。

 **インターネットから**
クレジットカードでご寄付いただけます。
(VISA、MASTER、JCB、AMEX)

本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載は固くお断りいたします。



特定非営利活動法人ジェン(JEN)
東京本部事務局

〒162-0824 東京都新宿区揚場町2-16 第二東文堂ビル7F
TEL: 03-5225-9352 FAX: 03-5225-9357

ホームページ
<http://www.jen-npo.org>

NPO JEN

検索



チャメンダ・ブシュバクマラさんは、
夫人、長女、長男の4人家族です。
(ラトゥナブラ県ニヴィティガラ地区出身)

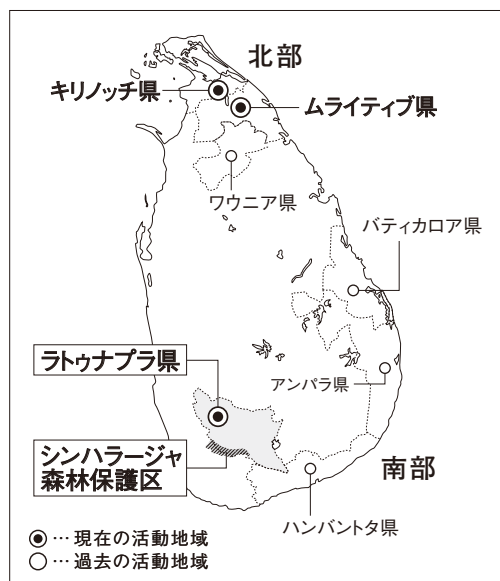
家族4人、
やっと雨音に怯えないで暮らせます。

私の家は、最近新しく建てたばかりでした。26日未明、3〜4本の太木がなぎ倒され家を直撃しました。翌朝、近くの学校に避難しました。妻は、ショックから心を閉ざすようになり、以来、子どもたちの面倒や家事一切を私がこなしています。子どもたちも、雨の音に怯えています。早速、簡易シェルターを組み立てたいと思います。

○面積：65,607km²(北海道の約0.8倍)
○人口：約2,103万人(2016年)(外務省HPより)

概要

2017年5月25日から26日にかけて、記録的な大雨がスリランカ南西部を襲いました。大規模な洪水は、床上浸水と山間部では地滑りを引き起こし、212名の死者、80名余りの行方不明者に加え、一時的に約7万人が避難を余儀なくされました。水が引くにつれて多くの避難民が自宅に戻りましたが、2万棟以上が半壊、全壊し、その多くが帰る家を失いました。政府が行う住宅再建は、6か月先といわれています。そのため、JENは、当面の生活を守るために、簡易シェルター資材を配布しました。



今回の配布物資となる簡易シェルター用資材23アイテムが被災地ラトゥナブラ県に到着しました。

1. 完成した簡易シェルター。これで生活が落ち着きます。
2. 譲渡式は、在スリランカ日本国大使館からも代表者が出席。合計13郡の150世帯へ資材を配布しました。



例年、5月から6月、9月から11月は、スリランカ南西部一帯を恵みの雨が潤すモンスーンの季節です。ところが、今年は5月25日から26日にかけて豪雨が発生し、大洪水に発展しました。降り続く雨は、ゆるんだ地盤に地滑りを引き起こし、谷に流れる川を塞ぎ止めました。溢れる水は地上を津波のように襲い、瞬く間に床上まで浸水しました。この災害で212名※の尊い命が奪われました。被災地ラトゥナブラ県の南側には、世界遺産のシンハララージャ森林保護区が広がります。広大な広葉樹の森が青々と茂り、この地方特有の動植物が多く保護されている低地雨林です。今回の地滑りでは、この保護区を含む周辺一帯が甚大な被害を受けました。JENは調査チームを被災地に派遣、緊急支援を開始しました。

まず、JENは被害を受けた地域の中から、特に住居を失った被災者が集中する中山間地を中心に調査を行いました。険しい山道を進んだ先にあったのは、急傾斜の山肌に張り付くようにある村々でした。地滑りからひと月以上経過していたにもかかわらず、多くの家屋が被災直後のままで、雨は降り続き、特に夜暗くなるにつれ人びとは不安な気持ちを膨らませて暮らしていました。約1週間、調査チームは毎日早朝から日暮れまで、被災した村々をくまなく訪れました。被災者の多くは、政府から支給されたテントを崩れてしまった自宅の横に設置し、暮らしを再スタートさせていました。中には政府の補助を受け、知らない土地で仮の住居に身を寄せている人もいました。行く先々で「早く自分の家に戻りたいんだ」という声が聞こえてきました。

特集：スリランカ

南西部 洪水・地滑り 被災者への緊急支援

ふつうの暮らしを取りもどす。

気候変動の影響について

JENは、2008年から北部(キリノッチ県・ムライティブ県)で紛争被災者を対象に、生活の再スタートをサポートする農業支援を行っています。近年スリランカでは、干ばつによる日常生活への深刻な影響が人びとの関心事となっています。そこでJENは、昨年からは気候変動に対応するために、通常の農業活動に加え農業訓練センターの指導員による気候変動対応型農業の講習会を開催しています。水不足に対応した農業の普及によって、人びとの暮らしを支え、安心できる生活環境の構築に貢献しています。

一方、昨年に続き今年も発生した想定外の洪水は、人びとにとって新たな脅威となっています。



JEN主催の「節水コンテスト」では
節水につながる様々なアイデアが集まりました



生きるちから マンスリーサポーター
新規お申込みキャンペーン実施中！(12月1日まで)

JENマンスリーサポーター募集中
www.jen-npo.org/monthly/

JEN マンスリーサポーター

検索



※出典：UNOCHA、2017年6月5日時点

1. チグリス川に架かる破壊された橋。
2. 破壊しつくされたモスルの街並み。かつて200万人が暮らしていた面影はいまはない。
3. 川の水を運ぶ子どもたち。不衛生な水を飲んでしまい、下痢からくる疾患など深刻な問題が山積みだ。



2

不衛生な水は、特に子どもたちにとって命にかかわる問題です。

JEN現地スタッフ

人びとは浄化されていない川の水を、どこからか運んでくるトラックから購入していました。武装勢力の占領によって、2年以上も働くことができず、収入がない人びとにとって、水はあまりに高価な品です。ですが、その水を飲まざるを得ず、下痢を起こす人が後を絶ちませんでした。特に、免疫の低い子どもにとっては命にかかわる問題です。モスルでは、設備の整った病院

が非常に少なく、薬局には薬がない状況が続いているのです。また、西モスルの人びとは厳しい日々を経験し、「人を信じる」ことに懐疑的になっているようです。私たちは、彼らが信頼を再び感じられるように寄り添い、時間をかけて一つひとつ丁寧に説明し、水の配布を実施していきます。

VOICE

スタッフ
の声



3

清潔な水を心待ちにしています。

西モスルに住む
ユニスさんとサードさん

VOICE

住民の声

浅い井戸からの塩辛(しょっぱ)くて臭い、汚い水を飲用水やシャワーなど生活の全てに使用してきたので、清潔な水の供給を心待ちにしています。長引いた避難生活で貯金が底を突きかけている人がたくさんいます。私自身も家の修復などにも費用がかかるため、今後の生活が不安でなりません。

あなたたちがここにいる。それが大きな希望です。

西モスルに戻ってきた女性

2年前に夫を亡くしました。今は、16歳の息子と家を片付けています。あなたたちがここにいるってことが私にとっては大きな希望よ。

VOICE

住民の声



私たちは、全てを奪われてしまった。

ハミードさん

VOICE

住民の声

日本の国旗が貼られた車をこんなところで見られるなんてうれしいよ。でも、私たちは、全てを奪われてしまった。私たちの家族、友人、隣人そして家や車を。やっと自由になれたけど、そのために失ったものの方が大きいよ。どこに私たちの未来がある？子どもたちに今何が残されているっていうんだ？

動画レポート
movie
report

緊急支援の最前線を行く
イラク・モスル西側

<http://www.jen-npo.org/jp/n/news/15529/>
JENの国際スタッフが撮影した街の様子をご覧ください。



イラクで厳しい暮らしを余儀なくされている人びとがいます。
緊急募金にご協力ください。

支援の
お願い

ご寄付は、郵便振替、またはクレジットカード。
皆さまからのご寄付は、寄付金控除の対象です。
最大で約40%が所得税の税額控除となります。
(詳細は裏表紙をご覧ください。)

特集:イラク

西モスル緊急支援

イラク第二の都市モスルは、2014年から3年もの間、武装勢力に占領されていました。2016年10月以降、イラク政府によるモスル解放作戦がスタートし、今年7月に終了しました。今、モスル市内から避難せずに暮らし続けている人、避難先から戻った人への緊急支援が急務となっています。



モスル東西をつなぐ橋は、多くが破壊され今は臨時の橋が架かる。



○面積: 約43.74万平方キロメートル(日本の約1.2倍) ○人口: 3,642万人
○言語: アラビア語、クルド語、他 ○主要産業: 石油(外務省HPより)

武装勢力の占領前、モスルには約200万人が暮らしていました。戦間によって、特に旧市街は激しい爆撃を受けたため、家、学校、病院、生活の何もかもが破壊されました。一時は100万人以上※が避難せざるを得ない状況で、その多くが今も避難生活を続けています。一方、今年7月、イラク政府はモスル解放を宣言。故郷への帰還を待ちわびた人びとが続々と戻ってきています。

川に架かっていた橋は、武装勢力占領時に破壊され、街は二つに分断されました。現在、仮の橋(写真上)が架けられています。限られた車両しか通行できず、それが東西の行き来を困難にしています。また、住民にとって最も切実なのは安全な水の確保です。川の水は、モスル周辺の村々の汚水が流れ込んでいるため、飲用には適しません。特に西側では、激しい戦闘によって水処理施設や水道管が破壊・切断されたため水問題が深刻です。

今後JENは、モスル西側で、市民に安全な水を届ける活動を始めます。給水車から届けられる安全な水は、人びとを水因性疾患から守ります。こうして、一日も早く、人びとが安心して暮らすをとり戻せるよう、モスルの復興に貢献してゆきます。

※出典: UNHCR, 2017年8月時点



1

安全な水が命をまもる。



乳搾り中のビビさん。子どもたちも手伝い、1日平均2.5Lの牛乳を生産しています。

「4年間の避難生活を終え、ようやく故郷に戻った私たちを待っていたのは、荒れはてた我が家でした。直後に夫を病気で亡くし、7人の子どもを抱え苦しい日々を送っていました。村の長老の勧めがあつてJENの畜産研修へ参加できたあの日、私の心は希望で溢れました。今では一定の収入があり、少しずつ生活が軌道に乗りに始めています。」

現在、ビビさんは配布された乳牛の餌と水やり、厩舎の維持管理が日課になっています。今後、JENでは女性世帯主を中心にした畜産研修を計画しています。

パキスタン

キトナ・ビビさん

毎日が
楽しいです



学校をより良くするための話し合い。いつもテーマは尽きません。(右から2人目がネロファーさん)

「私の4人の子どもは、JENが建設した学校に通っています。私自身も、学校の施設の維持管理等を行う『学校運営委員会』のリーダーです。パルワン県出身の夫について、この街で暮らし始めた外国人(イラン出身)の私にJENのスタッフがこの役を任せてくれた事は、ちょっとした自信を与えてくれました。今は、衛生教育や防災・減災教育、施設維持・管理方法などの研修を受けています。とてもやりがいを感じていますし、地域と子どもたちのためにも学校をより良い場所にしていきたいです。」

アフガニスタン

ネロファーさん

コミュニティの
期待に
こたえたい



離乳食の講座をはじめ、妊産婦の心のサポートをしています。

「東日本大震災の後、私が代表を務める福島県助産師会は、妊産婦のための電話相談やサロンを設けてきました。今年度からは、JENの支援を受けて、母乳育児と離乳食の講座を開催しています。ここには、地元の保健師、栄養士、小児科医等の母子支援にかかわる専門家が参加し、最新の母乳・離乳の知識を学び、連携を強めています。」

今後も、助産師ならではの立場を活かし、お母さん目線で母子が守られる環境をつくっていかねばと思っています。」

東北

小谷寿美恵さん

母子を見守る
環境を



女性が輝くプロジェクト

紛争や自然災害で、私たちの暮らしは一変します。
そんな時には、女性のパワーを活かす事が不可欠です。
なぜなら、女性たちの輝きが、
コミュニティ全体に活気をもたらすから。



作業中のヒンドウさん

「私達よりも大変な状況の家族がいることを、これまで知りませんでした。その方々をサポートできることに喜びを感じています」と語るのは、ザータリ難民キャンプに暮らすヒンドウさん。

JENは、キャンプ内で拡大する格差を最小限にするために、ここに暮らすシリア難民女性からボランティアを募り、コミュニティ・サポート・グループを立ち上げました。このグループは、互助の精神に基づき、女性が得意にしている手仕事で「自分の家族と、もうひとつの家族」の生活を少しでも良くすることを目標にしています。

ラマダン(断食月)の間は、食事を作り届けました。次は、マツトレスのカバーをもうひとつの家族のために作る予定です。

ボランティアとして活躍するヒンドウさんは、3年前に夫、二人の娘、

ヨルダン

ヒンドウさん

故郷を離れても、誰かの役にたてる喜び



コミュニティ・サポート・グループの活動は、いつも賑やか。

息子と共に、シリアの首都ダマスカスから避難してきました。新しい家の周囲は、出身地も家族構成も異なる知らない人ばかりでした。そのため、これまで友達が来ず、外出も控え、来る日も来る日も家族のためだけに生きてきました。

今では、このグループで出会った仲間と共に、厳しい生活をおくる家庭を訪れ、彼らの暮らしをサポートしています。こうして、キャンプのコミュニティに貢献することに意欲を燃やしています。



地域課題を解決! 熊本を元気にするプロジェクト

「明日のくまもと塾」、10月より第2期スタート!



明日の
くまもと塾
ASUKUMA

第1期の活動について、ウェブサイトからご覧ください。 <http://www.jen-npo.org>

「明日のくまもと塾」ホームページ <http://asukuma.net>

JEN EVENT CALENDAR

2017年10月26日(木)~28日(土)

毎年恒例! 「神楽坂 まち飛びフェスタ」に出店!

お家で眠っている「本」や「CD」、「お宝」などをぜひお持ちください。

会場/神楽坂毘沙門天入口付近
時間/11:00~16:00

ファッション・チャリティ・プロジェクト

Fashion Charity Project

あなたのご寄付が、女性の活躍を支えます。
お申込み▶ <http://www.jen-npo.org/fcp>

